◆幼時のこと

明暦3 正月18,19日に江戸の大半を焼き尽くした大火の直後、2月10日誕生

土屋の屋敷も焼け、外孫の内藤正親の柳原の屋敷の近くにたてた仮住まいで生まれた。殿は幼いうち白石のことを「火の子」と呼ぶ。 殿の母に可愛がられ、3歳の時に殿がお見えになり、可愛く思われて、毎日召し出されて、いつもそばに置かれた。

６歳くらいの時、陸奥国盛岡藩・南部重直（原本では利直になっているが、桑原武夫先生の現代語訳で書き間違えではないかと書かれている）に養子に望まれたが、「家来の子だから」と断る。「それなら世話をさせてほしい　成人後には千石の領地を分け与える」と望む。殿は「この子にとっては幸せでしょうが、私も母も慰むすべも無くなります」と

７歳　天然痘で重篤となるが、殿の母君　祈祷や西洋の薬を与えられ息を吹き返した。

◆3歳で字を知る

3歳　「上野物語」草紙を見ながら、写しがきをする。
4.5歳　土屋殿の家来　冨田（加賀國生まれ）『太平記評判秘伝理尽抄』の講義を大人に混じって聞き、質問する

◆6歳で詩を暗誦する

6歳の夏　上松（文字の教養のある　駿河今川の家来上松の子孫）に七言絶句の１首を意味を解釈して教わる。３首教わり人にも聞かせた。

◆学者には利根・気根・黄金の３こんが不可欠

昔から利根・気根・黄金　なしには学者にはなりにくい　と言われる。老人たちは白石が利根こそは生まれつき持っているが、幼くて気根はわからない。家が豊かとも見えぬから、黄金も心配だ。
父は殿がいつもお側に置かれるので、学問の師匠につかせることも難しい、と8歳くらいから習字を習わされた。

◆日課の習字

9歳の秋　殿が国に戻られる時「日のあるうちに行書草書３千字夜１千字を書いて出すように」命ぜられる。日課が終わらぬうちに日が暮れるときは、西向きの竹縁に机を出し、夜眠くなる時は水桶を二杯用意して、眠くなると一杯かぶり、二杯目をかぶると日課はだいたい終わった。

◆剣術を学ぶ

父の文を代筆

10歳の秋　「庭訓往来」を勉強させられ、11月10日で清書して提出するよう命ぜられ、お褒めに預かった。

13歳　殿の手紙の代筆

11歳　父の友人関の子供に剣術の技を教わり、16歳のものを3度負かした。

◆学問に志す

17歳　『翁問答』（中江藤樹）を借り、儒学に志を持つ

殿のところに来ていた医者　江馬益庵（玄牧）に『小学』『四箴ししん』を抗議してもらい、四所五経を暗誦　独学で勉強する。

◆初めて詩を作る

17歳11月　独学で初めて「冬景即時」という七言律詩を作る

21歳　土屋家を去り、学問をすることができるようになる。対馬國従者　阿比留と知り合う

26歳　堀田正俊に仕える。秋　朝鮮の使者に阿比留を仲介として、作ってきた詩百篇を書き３人の学者に見てもらう。9/1 客館にいき、通訳官・成琬（せいえん）書記官・李聃齢（りたんれい）副将・洪世泰（こうせいたい）と会い詩を作る。その夜、成琬が白石の詩集に序を作り送ってくれた。

◆初めて木下順庵に会う

30歳　出羽国に行った紀行文を阿比留が木下順庵先生にご覧に入れ、朝鮮学者の序のことなどを話すと、本人に会いたいと申された。

阿比留を介して木下先生の門下に入る。礼を取らずに親しい師弟となり、６代家宣将軍がまだ藩邸におられた頃、白石を推挙することになる。

◆土屋の殿の咎めを受ける

18歳秋　土屋の殿が亡くなる前年　11月　宿直の時に、猟を見に行ったことで、お咎めを受け、家に閉じこもっていた。

12月　殿の家来の親類や徒党が対立　双方が戦いを交えようとしていた。

父上が長年親しくしていた関という人の家に掛け集まった。白石も知らせを受けたので、才覚の聞く一人を関家に行かせ、「合戦が始まったと見えたら、帰ってきて知らせてくれ、例え皆が出立しても、戦いが始まらぬうちは、帰ってはならぬ」と言い聞かせて送り出し、家来には「自分は、風邪をひいて寝ている」と言え、戦い準備の扮装で布団をかぶって寝たまま待っていた。

午後8時ごろ、つかわした者が帰ってきて、「5時ごろ出立されると気になって、バタバタと事件が収集され、すっかり片付きました」と報告がある。

翌日夕方、

関の子どもが来て、「咎めを受けて、閉じこもっていたのにどうやってお屋敷の門を出ることができると思ったのか」と聞く

白石「他の門が守りが硬いから出られない。西の小門は、老夫婦が小屋に住んで守っている『これこれのことで私は死ににいくのだ。ここから出たとは言うものがないから、お前たちが罪を被らない』それでも出さぬと言ったら夫婦の首を切り、門を押し開けて出るつもりだった」

関の子「助けに来てやろうと思われたのは感謝する、しかしお咎めをうけて家に閉じこもっている人間が勝手に家を出ることは、よろしくない。ましてや、門番夫婦を殺して門を破ろうとするのは罪を重ねることになる」

白石「合戦をしようとしたのは罪ではないのか、あなた方が殺そうと思ったのは当家でもかなりの身分のひとびとだ。私が殺そうと思ったのは小さい門を守る夫婦者である。私がお咎めを受けていなくて、助けに行かなかったら、また、人々が戦死するのを傍観して私一人が家に閉じこもっていたら、勘当されていることを口実にうまく死を免れたと世間の人は思う。このような行動をしたのは、自分の恥にならぬようにと言うことだけを考えた」

席の子どもが、父親に報告すると涙を流して喜ばれた。

白石の父も喜び、殿からお咎めを受けたことも話さなかった。後から、父の友人関から、白石が助けに行こうとしたこと、関の息子との問答が詳しく手紙に書いて送られてきたという。

◆土屋家を去ったいきさつ、出仕禁止のこと

土屋の殿（土屋俊直）が亡くなり、嫡男伊予守（土屋頼直）が継ぐ。殿との仲もあまり良くなく、殿に従った家来たちのことをよく思っていなかった。父も1日も出仕することなく引退されたので、あまりよく思っていなかったが、老後を養う俸禄を与えた。白石は殿のそばで幼い頃から大きくなったので、伊予守は気に入らず、1年経つと、訳のわからぬことを言い出し、父の俸禄も奪い、白石の出仕も閉じ土屋家から追い出された。21歳

父母は陸奥にいる養子だった人に養われる。

22歳　延宝6年5月　母上没（63歳）

◆富商の養子となるのを辞退する

角倉了仁（織田信長の次男信勝に仕えた人　その頃80余り）が父上のところに来て、「伊予守は前の殿に信頼されている人は憎まれているので、あなたの息子も出仕の道が開けるとは思わない。親しくしている金持ちの商人が養子を探している。」

父「ご親切は忘れません、息子に聞いて見ます」

翌日父に話を聞いて、老人のところへ行き、お詫びしてお断りした。

父には、「自分の今の状況を気の毒に思っていらっしゃるでしょう。武士の家のに生まれながら、出資できず、私の代になって武士をすて、商人の家を継ぎたいとは思いませんと返答しました」と、話すと、父は嬉しそうな顔をして

「年寄りの父を養うために、身を捨てることも孝行だろうが、今言ってくれた事は、その孝行の道理は比較にならない。くれぐれも私のことは気にかけてくれるな」とおっしゃった。

◆医者になれと勧められて断る

ある人が私のためを考え言ってくれた。

「当節、医者を生業とする人の多くは、処方書すら読めぬ、あなたの学があり少し努力すれば、ヤブ医者とは比較にならないだろう。医者になり父上を養う計画を立ててはどうか」

「もし人の治療で間違いを犯せば、医は仁術にはならない。これは私にできそうもない」と答えた。

◆富商の婿となるのを辞退する

天下に並ぶ者がいない富商の子どもと学友になった。

富商の子「私の父があなたを拝見し、あなたは必ず天下の大学者となられる。私の死んだ兄の娘と結婚してもらい、金３千両と、買い入れた宅地を持って学費として、勉強していただきたいと」

白石「はじめは小さい蛇の傷も、大きくなると蛇の傷は１尺まりとなる。今は貧乏で、世間に名を知られてはいません。世間に知られるほどの儒者になった場合、その傷は大きくなってしまうでしょう。３千両の黄金を捨てて、大傷のある儒者を養成する計画は良いとは思わない。私としても、たとえ差し斬ったところは小さくても、傷を受けたいとは思いません」

その富商は河村（瑞賢）といい、孫娘の夫は黒川とか言って、父も祖父も儒者として有名な人であった。22歳ごろ